

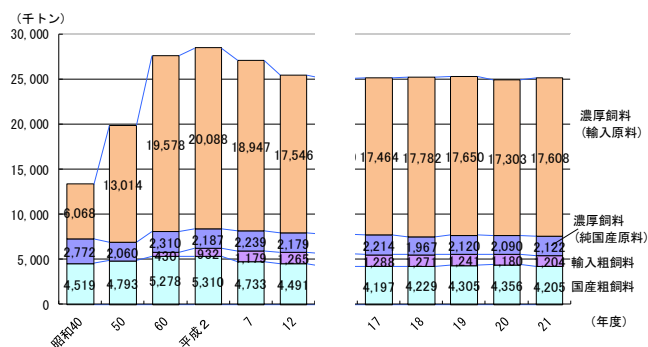
飼料



◆飼料需要量の推移

21年度の飼料自給率は横ばいで推移

図1 飼料需給量(TDNベース)

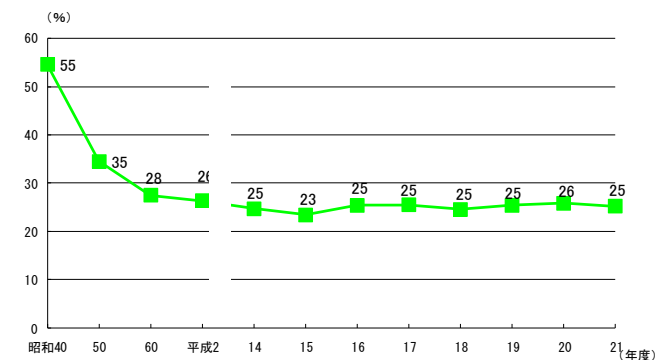


資料：農林水産省生産局畜産部畜産振興課

飼料の需要量は近年、家畜の飼養頭羽数の減少などを反映して、減少傾向で推移していたが、平成17年度には下げ止まり、わずかに上昇傾向に転じた。21年度(概数)の飼料需要量は、前年と比較して豚やブロイラーの飼養頭羽数が増加したことから、前年度を0.8%上回る2万5千TDNトンとなった(図1)。

注1:「TDN」とは、家畜が消化できる養分を数値化した「可消化養分総量」のこと。

図2 純国内産飼料自給率



資料：農林水産省生産局畜産部畜産振興課

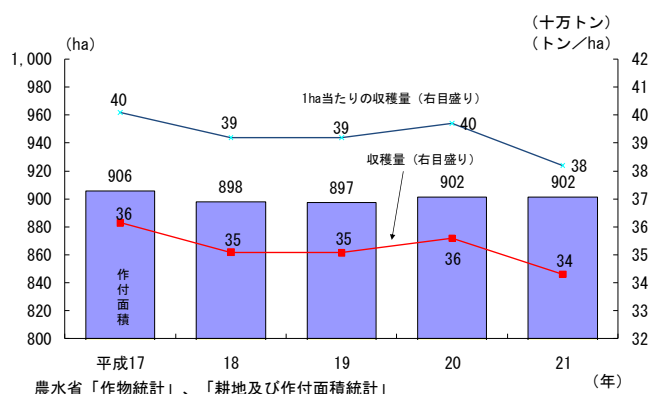
飼料の自給率を見ると、21年度(概算)の純国内産飼料自給率(国産粗飼料+濃厚飼料(純国内産原料)/総需要量)は、前年度1.0ポイント減の25%となった。その内、粗飼料自給率は前年度1.0ポイント減の78%となり、濃厚飼料自給率は前年度と同水準の11%となった。なお、「食料・農業・農村基本計画」における32年度の純国内産飼料自給率目標は38.0%である(図2)。

注2: 濃厚飼料の「純国内産原料」とは、国内産に由来する濃厚飼料(国内産飼料用小麦・大麦等)である。濃厚飼料「輸入原料」には、輸入食料原料から発生した副産物(輸入大豆から搾油した後発生する大豆油かす等)も含む。

◆飼料作物の生産

平成 21 年の収穫量は、前年並み

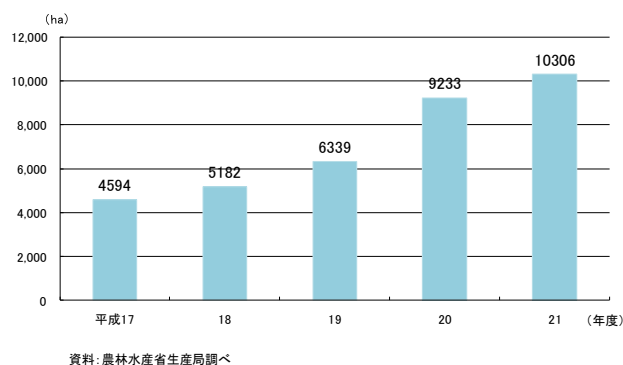
図3 飼料作物の生産



飼料作物の作付面積は、近年畜産農家戸数の減少に加え、草地(離農跡地)が畜産経営に円滑に継承されなかったなどから、微減傾向で推移していた。しかし、20年の作付面積は、90万2千ヘクタール(0.5%)と前年を上回り、21年(速報値)においても、前年水準を維持した。

飼料作物の収穫量(TDNベース)は、作付面積と単収の伸び悩みから、近年、横ばいないし減少傾向で推移しており、21年も作付面積は前年並みとなったものの、天候不順の影響により単収が前年を下回り、3,431千トン(▲3.6%)となった。(図3)

図4 稲発酵粗飼料の作付面積



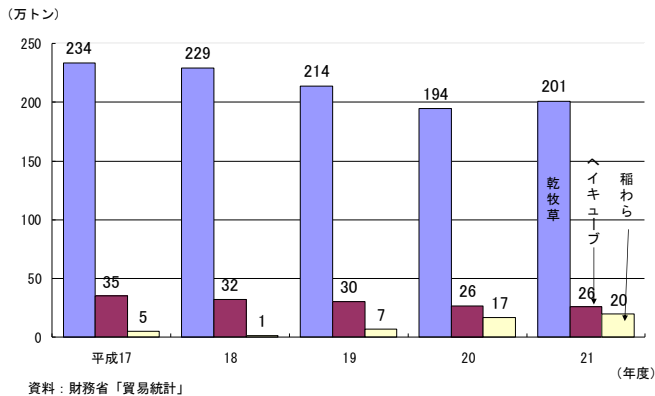
稲発酵粗飼料の作付面積は、17年度は、飼料作物への転作が進み、前年度をわずかに上回った。18年度からは、飼料増産行動計画に基づく取り組みの強化などから、前年度を大きく上回っており、21年度は飼料増産行動計画に基づく取組の強化などにより10,306ヘクタール(前年度比11.6%増)となった(図4)。

また、飼料用米の作付面積は、輸入トウモロコシとの価格差から一部の付加価値的な取組にとどまっており、作付面積は低調であったが、国際穀物価格の高騰、水田対策による支援の充実などにより急速に拡大しており、21年度は4,129ヘクタール(156%)となった。

◆粗飼料の輸入

平成 21 年の輸入量は、引き続き前年度を上回る

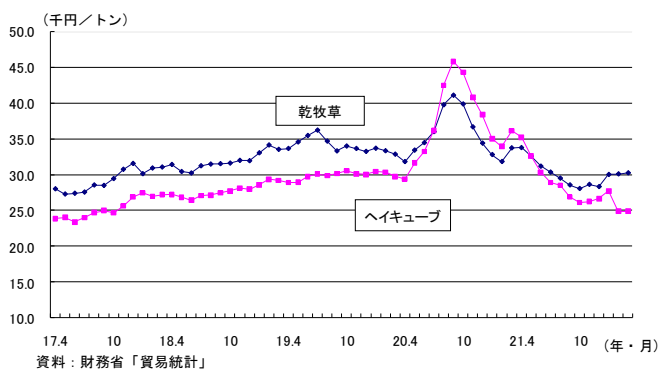
図5 粗飼料の輸入量



粗飼料の輸入量(TDNベース)のうちヘイキューブは、15年度以降前年度を下回って推移しており、21年度は、前年度をやや下回る25万6千トン(▲3.4%)と減少した。

乾草は18年度以降3年連続で前年度を下回って推移していたが、21年度は増加に転じ200万8千トン(3.3%)となった。稲わら(朝鮮半島、中国および台湾から輸入された穀物のわら、もみ)は、20年度は、19年8月に中国産稲わらの輸入停止措置が解除されたこともあり、輸入停止以前の水準にはないものの、前年度を大幅に上回り、21年度においても引き続き前年度を上回って推移した(図5)。

図6 粗飼料の輸入価格

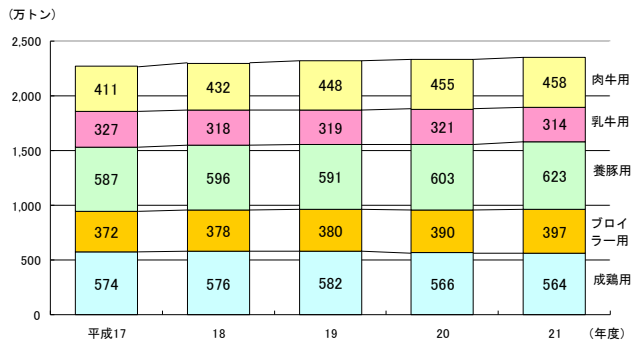


輸入価格(CIF)については、20年度のヘイキューブ、乾草の輸入価格は、気候変動による産地価格の高騰などに加え、国際的なバイオエタノールの需要の増加に伴い、産地においてトウモロコシなどへの作付け転換が行われたことにより生産量が減少したことなどから急激に上昇したが、その後、国際相場や海上運賃が大幅に下落したことなどから急落し、21年度はほぼ平年並みの水準で推移した(図6)。

◆配合飼料の生産

21年度の生産量は前年度を0.9%上回る2435万トン

図7 配合飼料の生産量



資料：農林水産省「流通飼料価格等実態調査」

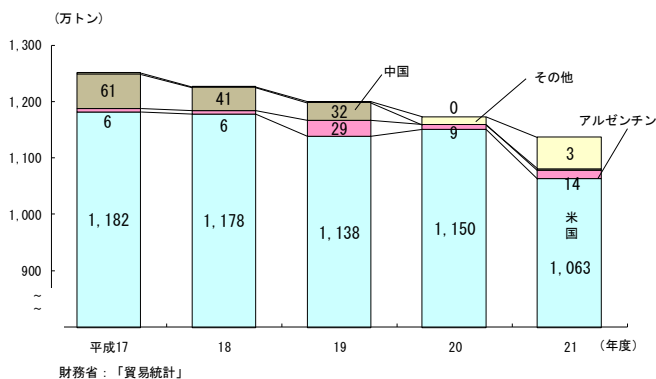
配合飼料の生産量は、近年は2400万トン前後で推移しており、21年度は、前年度を0.9%上回る2435万トンとなった。

畜種別に見ると、養鶏用、養豚用、肉牛用はそれぞれ前年度をわずかに上回る0.6%増、3.3%増、0.6%増となったが、乳牛用は前年度をわずかに下回る2.2%減となった。(図7)。

◆飼料用トウモロコシの輸入

輸入価格は前年度を大幅に下回る

図8 飼料用トウモロコシの輸入量



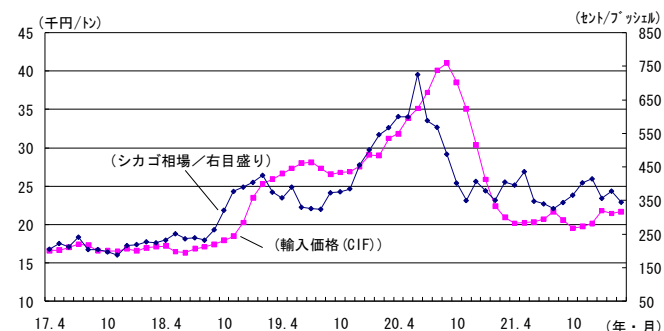
財務省：「貿易統計」

配合飼料の原料穀物(トウモロコシ、こうりゃん、大麦、小麦など)は、そのほとんどを海外に依存しており、トウモロコシは輸入量全体の約7割を占める。

トウモロコシの輸入量は18年度以降、減少傾向で推移しており、21年度は前年度を3.0%下回る1136万トンとなった。

21年度の輸入量を国別に見ると、最大の米国産が前年度を7.6%下回る1,063万トン、アルゼンチン産は同62.2%増の14万トンとなった(図8)。

図9 トウモロコシの価格



資料：財務省「貿易統計」、日本経済新聞（シカゴ相場、先物、期近価格）
注：トウモロコシ1ブッシェル（約36リットル）は約25.4g

トウモロコシの輸入価格は国際価格（シカゴ相場、期近物）の影響により大きく変動した。

トウモロコシの国際価格（シカゴ定期相場）は、20年秋以降、上半期の高騰から一転し、バイオエタノール需要の減少や金融危機による投機資金の流出、米国の主産地における豊作、穀物需要の減退懸念などを受け下落した。21年度の平均では、前年度を大幅に下回るトン当たり20,562円（37.3%安）となった。（図9）。

◆配合飼料価格

配合飼料工場渡価格は大きく下落

表 配合飼料の価格（建値）改定及び補てん状況

（単位：円/トン）

適用期間	価格改定額 （対前期差）	補てん単価		
			通常	異常
17年度 第1四半期	+	1,200	-	-
	+	900	-	-
	▲	800	-	-
	+	1,200	1,350	1,350
18年度 第1四半期	据置	700	700	-
	▲	500	-	-
	+	1,700	1,600	1,600
	+	5,500	6,500	4,640 1,860
19年度 第1四半期	+	3,200	8,200	4,371 3,829
	+	1,100	7,650	4,553 3,097
	▲	400	5,550	5,550 -
	+	3,900	7,800	7,800 -
20年度 第1四半期	+	4,500	10,500	8,983 1,517
	+	1,500	7,400	4,002 3,398
	+	2,500	7,650	5,252 2,398
	▲	12,200	-	- -
21年度 第1四半期	▲	4,200	-	- -
	+	2,800	-	- -
	▲	1,400	-	- -
	▲	500	-	- -

資料：農林水産省調べ

注：価格改定額は、全農のもの

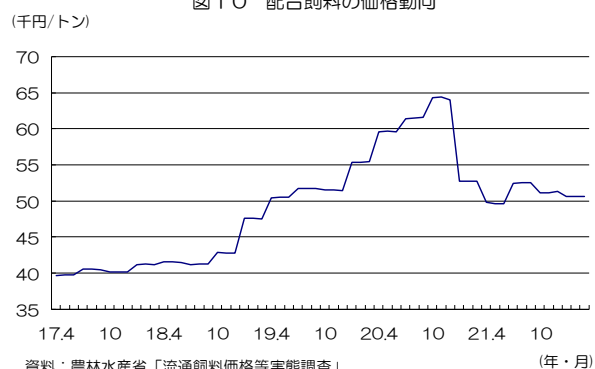
配合飼料価格は、飼料穀物の国際相場、海上運賃、為替レートなどの動向を反映して形成される。21年度の工場渡し価格は、前年度を14.3%下回るトン当たり50,999円となった。

一方、畜産経営においては、生産費に占める配合飼料費の割合が高いことから、配合飼料価格の上昇が畜産経営に

及ぼす影響を緩和するため、昭和43年に創設された民間の自主的な積み立てによる通常補てん制度と、昭和49年度には通常補てんでは対処し得ない異常な価格高騰に対応するために国の支援による異常補てん制度が措置されている。

近年の補てん状況は、通常補てんが18年10～12月以降9期連続して発動し、異常補てんが19年1～3月期以降3期連続および20年4～6月期以降3期連続して発動された。21年1～3月期以降は飼料価格が低下したため、発動されていない（図10）。

図10 配合飼料の価格動向



資料：農林水産省「流通飼料価格等実態調査」
注：全畜種加重平均の配合飼料工場渡価格